

O-0047**実習形態の違いによる学生の精神的ストレスに関連する要因の検討
—学生へのアンケート調査からの考察—**

大杉 紘徳, 横山 茂樹, 甲斐 義浩, 窓場 勝之, 村田 伸

京都橘大学健康科学部

key words 臨床実習・POMS-SF・アンケート調査**【はじめに, 目的】**

現在, わが国のみならず世界中で実習施設の確保が教育運営上の課題となっており, 新たな臨床実習形態の検討がなされている。その一つとして, 一施設に対して二人の学生を配置する実習形態(複数型)がある。従来では, 一施設に対して一名の臨床実習学生を配置し, 一名の臨床実習指導者の指導を受ける(単独型)が, 複数型では, 一施設に対して二名の臨床実習学生を配置し, 一施設内で二名がそれぞれに臨床実習指導者の指導を受ける。我々は先行研究において, 単独型と複数型で, 実習前後の気分・感情尺度の変化を比較した。その結果, 単独型と比べて, 複数型では実習中の精神的ストレスが高いことが明らかとなったが, その要因の検討までには至らなかった。そこで本研究では, 単独型と複数型の臨床実習形態の違いが, 臨床実習前後の学生の気分・感情状態に影響を与えた要因について, 実習後に行った学生へのアンケート結果から検討した。

【方法】

対象は, 検査・測定実習(3月上旬実施, 実習期間10日間)を実施した理学療法学科2年次生45名(平均年齢 19.3 ± 0.5 歳, 男性23名, 女性22名)とした。実習施設配置は, 臨床実習施設として登録されている施設に対して複数型臨床実習の実施を依頼し, 承諾の得られた11施設(22名)を複数型実施施設とし, その他23施設(23名)を単独型実施施設とした。測定項目は, 気分・感情状態の評価指標である Profile of Mood States 短縮版(POMS-SF)と, 筆者らが作成した臨床実習についてのアンケートとした。POMS-SF の回答から緊張, 抑うつ, 怒り, 活気, 疲労, 混乱の下位尺度得点を算出し, さらに下位尺度得点を用いて全体的気分を算出した。POMS-SF の測定は, 臨床実習開始1週間前(pre)と, 終了翌週の初登校日(post)に, 「過去1週間の気分」について回答させた。臨床実習についてのアンケートは, 先行研究を参考に作成し, 15の質問項目に対して, 5件法にて回答させた。アンケート得点は負の感情ほど低得点となるように設定した。アンケートはPOMS-SFのpost測定と同日に行った。統計学的解析は全て有意水準を5%とした。POMS-SFの下位尺度得点ごとに, preとpostおよび単独型と複数型について, 二元配置分散分析とLSD法による事後検定で比較した。また, アンケートの各質問項目およびアンケート合計点について, 単独型と複数型でMann-WhitneyのU検定を行った。

【結果】

二元配置分散分析の結果, 緊張($F(1,42) = 31.0, p < 0.01$), 疲労($F(1,42) = 4.4, p < 0.05$), 混乱($F(1,42) = 6.9, p < 0.05$), 全体的気分($F(1,42) = 6.2, p < 0.05$)に交互作用を認め, 事後検定の結果, 全てにおいて, 複数型のpostの値が単独型のpostの値よりも有意に高値を示した(全て $p < 0.05$)。アンケート結果の比較では, 「施設スタッフとの関係」およびアンケートの合計点で, 複数群が単独群よりも有意に低値を示した(ともに $p < 0.05$)。

【考察】

一施設に一名を配置する単独型と, 一施設に二名を配置する複数型で, 実習前と実習中の気分・感情状態の変化を比較するとともに, 実習に関するアンケートの差異について検討した。結果, 複数型の方が単独型よりも実習によって緊張, 疲労, 混乱の気分・感情が高まるとともに, 施設スタッフとの関係が悪くなったと回答する学生が多かった。我々は, 臨床実習を複数型で行う利点として同級生とともに実習を行うことによる安心感や精神的ストレスの軽減を見込んでいたが, 本研究の結果はこの仮説を支持しなかった。単独型の実習では, 同級生がいらないため, 情報収集や相談の相手が必然的に実習施設のスタッフとなる。一方, 複数型の実習では, 同級生とともに過ごす時間が長くなることにより, 実習施設のスタッフとのコミュニケーションの時間が減ったと推察される。そのため, 単独型と複数型では実習施設のスタッフとのコミュニケーションに差があったことにより, 信頼関係の構築に差が示されたと考えられる。臨床実習におけるストレスの原因として対人関係の問題が最も影響を与えると報告されていることから, 施設スタッフと良好な関係を築けなかった複数型の実習では, 実習中の学生の緊張や疲労といった負の感情が高まったと考えられる。

【理学療法学研究としての意義】

臨床実習は理学療法士養成課程における重要なカリキュラムである。臨床実習中に受ける学生のストレスは非常に強く, その対応についてはこれまでに数多く検討されてきた。本研究結果は, 今後の理学療法養成課程における臨床実習形態について検証した有意義なものと考えられる。